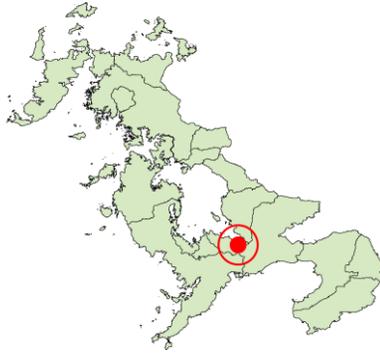




## 津水湾（つみずわん）地区について

津水湾地区は、長崎県諫早市の西部に位置し、大村湾の湾奥に面する。諫早市は、長崎県南部の中央に位置し、東は有明海、西は大村湾、南は橘湾と三方の海に囲まれ、交通の要所として古くから栄えてきた。また、大村湾奥に位置する当地区は、古くから海とともに生活を育んでおり、350年以上続くパーロン大会が今も神事として行われている。



## 大村湾の現況

大村湾は、針尾瀬戸と早岐瀬戸の2本の細い水路で佐世保湾、そして外海につながる二重の閉鎖性海域である。そのため、海水交換が他の湾に比べて非常に小さい。また、生物生産力や自浄作用性が高い水深5m未満の浅場が少ないことも特徴の一つである。

こうした閉鎖性の強い大村湾では、近年、層の厚い貧酸素水が7月から9月にかけて湾中央部を中心に広い範囲で発生している。また、湾奥にある当地区では青潮による被害がしばしば発生している。加えて、アオサやアオノリ類等の大量発生、流木や流れ藻、生活ゴミ等の大量漂着、それによる底質などの環境悪化も大きな問題となっている。

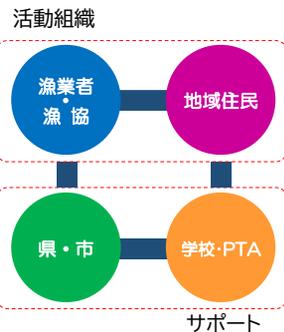
こうした湾奥の環境悪化は、地区で漁獲されるスズキやイイダコ、カニ類、ナマコ、アサリ、サルボウガイなどの水産資源の減少を招き、その対策が強く求められている。



## 組織の設立および活動方針

上記課題の中、漁業者や流域住民が中心となり「津水湾環境保全」を平成21年度に設立し、活動を開始した。

活動の方針は、減少した干潟の二枚貝資源の回復や現存する藻場（主にアマモ場）の維持を図り、これら生物生産力をもって大村湾奥の漁場環境の再生を図る。



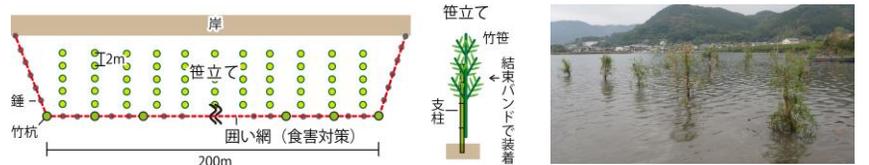
- ① 干潟の二枚貝資源の回復**  
現存するアサリやハマグリなどの二枚貝資源を回復・維持し、干潟の生物生産力の向上を図る。
- ② アマモ場の維持保全**  
現存する不安定なアマモ場を維持保全し、安定的な藻場の再生を図り、浅場の生物生産力を促進する。
- ③ 学習会の開催**  
地域の小学校を対象に、地先の大村湾の環境や漁業の現状を伝え、その保全に係る興味・関心を喚起し、その継承を促す。

## 干潟を含む浅場の生物生産力を高める

### (1) 干潟の二枚貝資源の回復

二枚貝資源の回復活動として、①稚貝の沈着促進、②エイ類等の食害防止を行う。

稚貝の沈着促進は、竹笹を干潟に立て（以降、笹立てと称す）、それによって稚貝の着生を促すとともに、砂の移動による逸散を防ぐ活動。また、エイ類等の食害防止は、笹立て周りに囲い網を設置し、その侵入を防ぐ活動を展開している。



### (2) アマモ場の維持保全

当地区に繁茂するアマモは、主に一年生で、秋に大きく減少するため、アマモ場の生育密度が不安定で、疎生状態が続く年もある。そこで、本種の播種活動を実施している。播種は、①花枝採取、②種子の熟成、③種子選別・保管、そして④直播きする。また、現在は、アマモが減少し、広範囲に播種できないことから、活動区域に設置した筏に花枝を入れたカゴを吊し・放置し、自然に種を落とす方法で取組を進めている。



### (3) 学習会の開催

地域の小学校を対象に、大村湾の環境や漁業、また当組織の保全活動に係る学習会を年1回実施している。

学習会は、学校のPTA活動、もしくは総合学習の一環で行っている。プログラム構成は、公民館での座学と地先海域での課外授業としている。



## 活動の成果と課題

平成21年度から浅場の生物生産力の向上を目指し、長年、干潟や藻場の再生を目指し、上記以外にも様々な活動を行ってきた。その結果、干潟でサルボウガイやハマグリが一定の密度で生息したり、アマモ場が一定量維持されるようになったり、活動の効果が得られるようになった。

しかし、ここ数年の豪雨災害や大型台風の襲来などによって、サルボウガイがいなくなったり、アマモが減少したりしている。そのため、今後も活動を継続し、湾奥の漁場環境の回復を図っていきたい。また、その継承を図るためにも、啓発活動を引き続き行っていきたい。

